

辰野
隆

弟子

— 井伏鱒二 —

弟

子

—井伏鱒二—

弟子という題目で何か書いてもらいたいという注文を承諾したことはしたものの、今、井伏鱒二君を語るに当って、その人を弟子と呼ぶほど僕は思い上っているわけではない。三十年前、早稲田大学の教室で、井伏君やその他の学生諸君に僕の未熟なフランス文学観を開陳したことはあるが、昔のへぼ教師にして今なおへぼ老書生にすぎぬ僕が、いささか年長なるが故を以て、今日知名の作家となった井伏君を弟子呼ばわりをしたら、恐らく天秤星座の針を狂わすこととなるだろう。元々、僕には弟

子と呼ぶ可き後輩は一人もないのだ。三十幾年このかた、教壇から学生生徒に自己流のフランス文学を講じてはいるが、未だ嘗て聴講者を弟子とも教え子とも思ったこともなく、自ら先生を以て任じた覚えもない。常に同じ水平線上に立つ話手として、聴手に向って、僅かに知れるところを口述したにすぎない。そういうわけだから、僕の話相手は常に仲間でもあり、相棒でもあったが、弟子だの、教え子だのと、肩の凝る重荷はこちらから先に御免蒙っていたのである。然し、井伏君に就いては、日頃友として、その独特な小説や随筆を愛読してもいたし、

一風格ある為^{ひととなり}人を珍重してもいたから、何時か機会があつたら、愚見を陳べ冗言を連らねてみたいと思つていた。ところが先日、幸いにも、年に一度か二度、定期的に襲来する大腸カタルに罹つて——多量の麦酒^{ビール}と和酒と不消化物のコンクールが原因だった——二三日の間、殆ど絶食状態で臥床したので、一卷の『本日休診』をまたたく暇に読了したのみならず、その余勢を駆つて更らに河盛、小島、谷長、三君の名訳、ゲオルギウの『二十五時』をも一気に読破し去つたのである。此の二つの制作は近頃僕の読書欲を十分に満悦させた良書であつた。『二

十五時』の興趣はレマルクの『凱旋門』に匹敵するが、その思想的領域は『凱旋門』よりも遙かに広汎でも切実でもある。言語道断なソ連の非人間的暴圧を辛うじて逃れたルーマニアの一農民が、新大陸的な技術的統制に依つて一時救われることとなったが、要するに新しい画一制にも心からは笑えぬ悲しげな苦笑をもらす、その感慨——今までの二十四時間の中に、（これをルネッサンス以後現代までを象徴する期間と見てもよからう）旧来の個人的自由は悉く駆逐せられて、例外なき統制の最初の時期、即ち、絶望を以て創はじまる第二十五時の暗澹たる感

慨——を沁々味わわされたのであった。然るに、『本日
休診』に収められた六つの短篇には不気味な世界的低気
圧を予告する凶徴は描かれてはいない。読む僕もそうい
う無理な注文をつけて、此の好短篇集を披いたわけでは
なかった。何等の重大問題を考えずに、至極穏かな心も
ちで読み了って、頗る愉しい印象を得たのである。井伏
文学には他に見られぬ特殊な境地がある。井伏君の心の
底にも牢固たるペシニスム、孤独地獄が横たわっている
のだろうが、ペシニスムや孤独地獄なら、寧ろ近代の世
界病であって、その最尖端にはサルトルやカミュの如き

作家もいることだから、慎みぶかい我等の井伏君を強いて持ち出す必要もない。唯、井伏君に在っては、近代的なペシミスムや孤独地獄が徐ろに湧き出るフアンテジーやユーモアに温く包まれて、親しみやすい、日本的な寂寥感になっている。面もその寂寥感は都会の神経質な喧騒を避けて、地方的な逸興に就き、仮令、都会の事件を扱っても、敢て都心を嫌って郊外の野暮に逃れて描くと云ったところがある。加之、我等は井伏君のフアンテジーやユーモアの源に遡ると、漱石の『猫』や『坊っちゃん』に到る線を見出し、井伏君の文体を凝視すると、鷗

外晩節の筆致から益を承け、而もそれを独自の地方色で染めあげているようにも思われる。

「ちやうど驟雨のあとで、ゴム林のなかは涼しかった。……ところどころ、原っぱに爆弾の落ちた跡が大きな穴ぼこを拵へ、それに濁り水がたまつて、不図した池をつくつてみた。その濁り池の一つに、水牛が二ひき仲よく浸かつて首だけ現はしてみた。その片方の水牛の角に、白鷺が一羽とまつてゐるのが見えた。水牛も白鷺もじつとして、これらの鳥獣は、工兵部隊の架橋

工事をうつとりして眺めてゐる風であつた。」（『遙拝隊長』）

一風變つた、珍らしい南方の戦時風景である。

「……友村上等兵の墓は、岡屋といふ兵が、川ばたにゴムの木の枝を差して墳墓と仮定した。友村が『戦争ちうものは贅沢ぢやのう』と云つたのは、この岡屋といふ兵が、『なんちう贅沢なことぢや。惜しげもなく爆弾を落としとる』と云つたからである。岡屋は、友村

の奇禍も自分の責任であると云ひながら、その責任は、概ね一割がたと見るのが妥当だと云つてゐた。故障車を不意に動かした運転兵の責任は、一割ださうである。余りの七割の責任は誰が引受けるべきか自分は知らないさうであつた。それは、友村が故障車から落ちるとき、友村にすがりついた隊長の引受けるべきものだといふ意味だらう。言外にそれが溢れてゐた。」（同前）

戦地に於ける犬死の呆らしさ、なさけない苦味が自ら唇に浮んで来る。

「……表に行くと、無精髭を生やした中年者が、黒羅紗詰襟服を着て下駄ばきで立つてゐた。『すみませんです』とその男は、耳にはさんだ煙草をとつて丁寧にお辞儀した。それからまた、もと通りに煙草を耳にはさんだ。』（『本日休診』）

何となく可笑しい。電話の受話器を耳にあてて恭しくお辞儀している奴よりも一層可笑しい。

盲腸患者の介添人と三雲八春先生との対話。

『もつと早く、医者に連れて来なくつちやいけない』
『ねえ先生、こいつはいつもの通り、持薬でなほすつ
もりでね、持薬をがぶがぶ呑んで頑張つてたんだ』

『がぶがぶ呑むつて、何を呑むんだね？』

『ハコベとゴボウを煎じたのが、こいつの持薬でね。』

この野郎の云ふには、ハコベは盲腸の腐れを水にする。
その水を、ゴボウが瓦斯にする。——そんなのは先生、
ちよつと眉唾だね？』

『さうだね。眉唾かも知れないだらう』（同前）

読者は恐らく失笑を禁じ得ぬだらう。

「『それでちやうど百箇です』と見習ひの職人が云ふと、

『今度は、羽田屋の三勺減りの一升徳利だね』とお婆さんはさう云つて、やはり同じやうな形の徳利をつくりました。

『三勺減りの一升徳利とは、どんな性格なものですか？』

見習職人にきくと、九合七勺入りといふ意味ださうでした。」（『貧乏徳利』）

此の短篇集から我等を怡たのしませる行文を求めらるなら、なお幾多の例を易たやすく挙げ得るだらうが、兎に角、斯ういうユーモアなりファンテジーなりが、極めて平明な筆致で、世相や人心の虚を突くところに井伏文学の笑いが生れ、時に一滴の涙を蔵す笑いが潜んでもいるのだ。そこを我等は高く買うのである。而して作品を通して井伏その人をいともなつかしく思うのである。而もそれが小

鳥を愛し、窈かに小鳥の巢を覗いて悦び、時に俗流にヤマメを求めて持竿不顧の樂を恣にする作家でもあり、一芸一能に何か悟りをひらいたとも云い得る八春先生や、徳利婆さんや丑寅爺さんに静かな愛情を惜しまぬ達人でもあるのだ。

『満身瘡痍』の中に、曾て井伏君が某書店に勤めていた頃の思い出があるが、そこに、井伏君と僕との些細な交渉が誌されている。

『さ・え・ら』の原稿は、出版部長の十一谷義三郎

が、人を介して辰野氏からもらつて来た。検印は私が受取りに行つた。……書齋にはひつて行くと、大テーブルの背後と左右に洋書が山と積まれ、一見、洋書で出来た巖窟内に、テーブルの置いてある感じである。そのテーブルを前に控へ、辰野氏は新聞か何か読んでみた。

『「さ・え・ら」の検印を頂きに参りました』と私は云つた。何年ぶりかで私は辰野氏を見たのである。早稻田の教室で二年ほど教はつて、外遊の送別会の一夕談をきいて以来のことである。しかし私は、一言

もそんなことは口にしなかつた。無論、辰野氏も私の顔に記憶などないだらう……。」

此の件りを讀んで、僕は今更のように驚いた。そうした事のあつたのを全で忘れていたのだ。不思議なのは、検印の事実を跡形もなく忘れているにも拘らず、井伏君の顔と名とは早稲田時代からはつきり覚えていたことである。井伏君のみならず、当年の青木、及川（此の二人は夙に故人となつた）、佐藤、小林、内田の諸君の顔と名も忘れてはいなかつた。

ところが、数年ぶりに、僕の書齋で、間近かに井伏君と顔を見合せながら、僕の放心癖から、何処かで見たよ
うな人だと思いつつ、その人を早稲田の教室と結びつけ
ることが出来なかったのに相違ない。全く、記憶という
ものは不思議ないたずらをする。もし、その時、僕の記
憶が確かであつたら、検印などはそっち除けにして、井
伏君と呑気な雑談に耽つたことだつたらう。それを、事
務的な検印だけで帰したのは重々失礼でもあり、残念な
ことでもあつた。今、引用した文中に「……外遊の送別
会するとき一夕談をきいて以来のことである」という言葉

があるが、それに就いて思い出した事がある。その送別会は大正十年の三月末か四月の初めであった。僕のフランス留学を送る会であった。場所は早大の或る教室で、十数名の学生の他に、哲学の金子教授、フランス文学の吉江教授が同席であった。一夕談というのは、その席で、金子教授や吉江教授の懇篤な送別の辞に対して僕も何とか挨拶をしなければならなくなって、已むを得ず立ちあがったが、さて、どういふ答辞を陳べようかと暫く迷った末、お笑い草に自作の寸劇を御披露に及んだのであった。当時、僕は軍部の専横ぶりが漸く露骨になって来る

のに強い反感を抱いていた。軍人が忠君愛国をモノポライズして、天皇を全く偶像に祭りあげ、民衆が祖先から伝え受けた、和氣に充ちた尊皇愛国の真情を蹂躪して憚らぬ厚顔無恥が虫唾むしずのはしるほど厭やだったので、それを揶揄する座興の寸劇だったのである。

舞台は須田町、東京でも最も醜悪な記念物の一つであった。広瀬中佐の銅像の傍らである。陸軍少尉大和武雄とさくらという芸者が暗にまぎれて、あいびきの場面よろしくあって、武雄が熱意をこめて、さくらの顔を見つめながら問う、「貴様はこの俺を愛しとるか。一番愛しと

るのか？」若い芸者が答える。

「一番じゃないわよ。二番目よ。一番は」と彼女は云つて、宮城の方角へ向きなおってから、「一番目は彼処にまします上御一人よ、その次が、あなたなの！」

この言葉を聴くと颯爽たる少尉は、たちまち感極わまつて、同じく千代田城の方へ向つて直立不動の姿勢を取ると、最敬礼をしてから、改めてさく、らを顧みて、「よく言うた。よろしい！」と云つてハラハラと落涙に及んで、二箇の青春はショーヴィニスムの大接吻を交わす。恰もその時、職人体の男が一人どこからともなく現われ、

感慨無量の帝国軍人と芸者との様子をチラリと斜めに睨めると、「ふふん」と鼻であしらうような語氣をもらしてから、君が代くずしという都々逸を唄いながら去りゆくところで幕にする。その都々逸の文句は「さざれ石 苔のむすまで忠義もいいが そうはからだが続かねえ」というのである。

この寸劇の発表で、学生諸君は大笑し、吉江教授は微笑し、金子教授は苦笑した光景を今もなおありありと覚えていてる。

この一夕談に就いては井伏君が昨年何かの雑誌に書い

たが、恐らく記憶がおぼろであつたのだらう、筋の運びに大分まちがいがあつた。その記事を読んで間もない頃、或夕、僕は河盛君の家に招かれて、井伏君、上林君、齒科の越田先生と一座して痛飲放談高吟した。実に賑かな楽しい会合だつた。その席で僕は一夕談に関する井伏君の記憶の誤りを訂し、ただ大いに笑い、大いに酔っぱらつて歡を尽したのであつた。

最近、「文藝」八月号に、故太宰治が井伏君に与えた書簡が転載されているのを興味を以て読んだが、その一

通に次のような件りがあつた。

「『いくさにも負けたし、バイショウ金などもたくさ
んとられるだらうし。』」

『イヤ、そんな事は何も心配ない。無条件降伏ではな
いか。よくもしかし、無条件といふところまでこぎつ
けたものだ。』」

大まじめに答へたといふその人は、隣村の農業会長
とか何とか立派な身分のお方ださうです。神州不滅な
り矣。」

果然、逝けるアンファン・ガテ太宰治は生ける井伏鱒二の弟子であった。

(昭和二十五年夏)

日本文学電子図書館

弟子一井伏鱒二

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館